

日	時	天候	雲量	風向 / 風力	氣温	水温	比重	備考
昭和五年九月十日	午前十時	晴	三	南東	二九、五	三〇、〇	三、〇	現場比重
九月十一日	午後四時	晴	四	東	二七、五	二九、五	二〇、八	
九月十二日	午前十一時	晴	二	南東	二九、〇	三〇、〇	二、五	
九月十三日	午後四時	曇	七	南	二八、〇	三〇、〇	二〇、九	

### 四、垂下式牡蠣養殖試験

#### 一、要旨

本縣下ニ普通多ク見ラル、天然産牡蠣ハ一見シテ眞牡蠣ト全々別種ノ如ク認メラル、モ形態上マガキ *Ostrea* *crassus* *Thunbergi* ト認メラル、モノニシテ体萎縮シ成長鈍ク形小ニシテ産業的價値アリト認メラレザルモノナ、産業上又生物學的見地ヨリ水形學的性質ヲ異ニセル本縣ニ内地産眞牡蠣ヲ移殖シ果シテ一定ノ期間内ニ充分成シ得ルヤ否ヤヲ知ルヲ必要ト認メシニヨリ今回左記ノ如ク移殖垂下試験ヲ行ヘリ。

#### 二、試験場所

本試験施行ノ箇所ハ縣下國頭郡名護町許田浦灣入江ニシテ許田ハ本島西海岸中央部ニ位シ北面シテ名高キ名護ニ臨ム入江ハ許田橋ヲ以テ外海ト境シ東方ニ擴リ周圍ハ小高キ山ニヨリテ圍マレ風波ノ影響少キヲ以テ試験箇トシテハ適當ノ地トス。

試験地点(別紙圖面ノ通り)ハ入江ノ西方ニシテ底質ハ砂泥質ニシテ水深ハ干潮時二三尋半海水ノ比重ハ非常

低ク平均一、八四—二〇、〇〇ナリ次ニ「ブランクトン」ハ相當量アルモ其種類甚ダ少ナク全部動物性ナリ、種類ハ撓脚類及軟体動物類ニシテ採集セルモノハ八割迄巻貝ノ幼少ナルモノニシテ他ハ「カラヌス」類「メダブリアス」等ニシテ牡蠣餌料トシテ可ナル硅藻類ハ一ツモ見當ラズ。

### 三、試験ノ方法

#### イ、種 苗

本縣下ニ於テ適當ナル種苗ヲ得難カリシニヨリ東京ローヤル養蠔商會主宮城新昌氏ノ厚意ニ依リ宮城縣渡萬石浦産ノ蠔殻附着ノ種苗ヲ用ヒタリ。

#### ロ、設 備

末口三寸角ノ杉材長サ二間四方ノ筏ヲ三個作り各材ニハ經三寸五分ノ浮子竹ヲ一本宛組合セテ浮上セシメ、筏ニハ一尺置キニ三寸釘ヲ打チ込ミテ種牡蠣垂下ニ供セリ尙各筏ハ碇綱經三分長十尋ノワイヤローブニテ四隅ニ結ビツケ之レニ二十六貫大ノ碇石ヲ四隅ノローブニ結ビツケテ筏ニ固定ス。

#### ハ、垂 下 方 法

附着殻六個ヲ十二番線亞鉛引針金ニ通シ牡蠣ノ一ヶ所ニ集マルヲ防グタメ經五分長サ五寸竹ヲモツテ相互ノ間隔ヲ計リタルモノヲ一連トセリ、其ノ一連ノ長水面下五尺ニシテ前記筏ノ釘ニ懸ケテ一尺置キニ一本ノ母木ノ兩側ヨリ垂下セリ而シテ一個ノ筏ニ九六連合計二百八十八連垂下セリ。(別紙圖面ノ通り)

#### 四、試験ノ經過概要

今回垂下ニ要セシ日數ハ昭和六年三月十日ヨリ全十三日迄ニシテ萬石浦産種牡蠣(蠔殻附着)ビール箱ニテ五箱三月十一日前記ノ方法ニ依リ垂下セリ而シテ今回送附ノ牡蠣ハ斃死セルモノ殆ド見當ラズ尙一箱内ノ牡蠣殻ノ個

數ヲ調査セシニ七百六十四個五箱分總計三八二〇個ニシテ垂下シ得タル牡蠣ハ合計一四四〇個ニシテ他ハ干潟面ニ撒布セリ今附着介二十個ニ付キ重量並ビ稚介附着數及ビ殼長布ヲ調査セルニ平均介殼一個ノ重量一四匁七附着セル稚介ノ數二十四個及ビ殼長一、三櫃殼巾〇、八櫃アリタリ

五、試驗場所水溫比重

日	時	天候	潮汐	風向	風力	氣溫	水溫	比重	摘	要
三月十一日	午後四時半	晴	低	北	一	一九、〇	二二、五	一九、九三		
三月十二日	午後二時	晴	低	東	三	一九、五	二二、〇	四、二四		
三月十二日	午後四時四十分	晴	低	南	二	二〇、五	二二、五	二五、七三		
三月十三日	午前九時半	晴	低	西	一	二二、一	二五、〇	三〇、三〇		
三月十三日	午後十二時半	晴	低	西	二	三〇、〇	二二、〇	一五、三三		

### 五、各種調査

#### 1、鰹成熟狀況調査

本年度圖南丸ノ漁獲セル鰹ニ就キ成熟ノ調査ヲ試ミタル結果ハ左表ノ大部分未熟セルモノヲ認ム

一、漁場金剛會根 Long 125° 49' E Lat 25° 13' N 鰹